

野田のから傘屋 (下野田町)

野田に辰造さんと言う働き者が、から傘屋を営んでいました。

朝はまだ皆が寝ているうちから、着物にたすきを掛けから傘の油(えの油)といって二カワのは入った特別の油(あまの油)を塗ったり、畑にから傘の柄をちくりさして(つきさして)乾かしたりしました。



また、夜は暗くなってしまってもろくろつなぎをしたり千代紙張りをして一生懸命に働きました。でも、辰造さんがあんまりしごとし(非常に仕事をする人)なのでお嫁さんが、「こんなにつらい暮らしはいや」と出ていってしまいました。

何度目か、やっと辛抱つよい心の優しいお嫁さんにめぐりあいました。

辰造さんはとても喜び、

「お前さんは福の神さんや。」

といて大切にし、二人仲良く仕事に励みました。二人で仕事をするようになったのと、ごさ帽子からから傘に変わった時期だったので、から傘はほとんど売れゆきました。

福井県中に、野田の傘といて名が知れるようになり、評判の日増しに良くなってゆきました。あまり売れるようになったので仕事が追い付かず、何人かの人が働きに来るようになりました。

村の人も田んぼの仕事が暇になると、

「うらら（わたし）にも売んに歩かしくれの。」
 と風呂敷に二十本ほど包んで、武生や近くの村に
 かずき商いに出かけました。

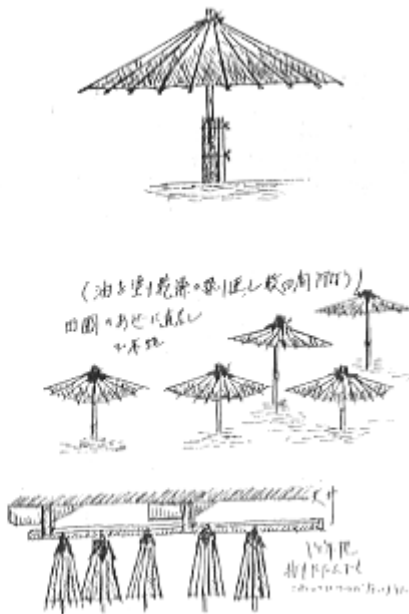
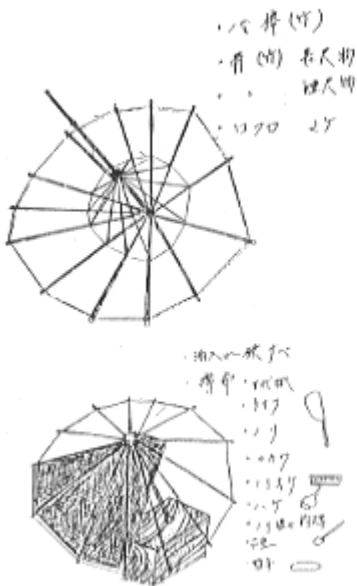
リヤカーにから傘を積んで福井までも売りに行
 く人もいました。

それで辰造さんのから傘やさんはとてもお金持
 ちになりました。

「これは、神様や仏様のお陰や、ありがたいこと
 やー。」

「よるこばなあかんげの。」
 と、一生懸命に働きました。そして、辰造さんは
 お寺にお参りする時はマントの中から傘を隠し
 て持って行って寄付して来たり、他にも色々な所
 へ傘を寄付して歩きましたので、益々評判が高ま
 りました。

ちょうど、その頃（昭和八年）昭和天皇が福井
 県へおいでになり、陛下に献上する品がいくつか



選ばれました、その中に辰造さんのから傘も入り、辰造さんの家は大騒ぎになりました。

家は何日も前からピカピカにみがいて掃除をし、献上品のから傘を作る日には畳も入れ替え、使う物は、ハケ、柿のしぐ、油等すべて新品で揃え、立派な桐の箱も準備しました。

仕事場は金屏風で囲い、国のお役人に見守られながら辰造さんは羽織、袴姿でから傘を作りました。それで、また野田のから傘は有名になり、よく売れるようになりました。

そんなに良く売れた野田のから傘も、こうもり傘が現れてからはだんだんと売れなくなり、今では姿を消してしまいました。

辰造さんも昭和二十八年に七二才で亡くなり、今では、もうほとんどの人が、野田に大きな傘屋があつたことさえ知らなくなつてしまいました。今でも人は辰造さんの家を『から傘や』と呼んでその屋号だけ残しています。